

中西夏之

《コンパクト・オブジェ》



中西夏之(1935- )  
《コンパクト・オブジェ》

1962年  
14×23×14cm  
ポリエステル樹脂他  
平成25年度購入

透

明なポリエステル樹脂の中に雑多な事物がぎっしりと詰まっています。いったい何が入っているのかと仔細に眺めてみると、貝殻や時計といった美術のモチーフとして見慣れた事物ばかりではなく、潰れたボールや魚の骨に髪の毛まで含まれています。「これってゴミじゃないのー」という驚きとともに、記憶の中に眠っていた腐敗臭が立ちあがってきます。

中西夏之の「コンパクト・オブジェ」はその内容物が一様ではなく、ひとくくりに論じることが難しいのですが、こと初期作に關して言えば、同時代の廃物を利用した「ジャンク・アート」の中に位置づけることが可能です。しかし欧米のジャンク・アートが基本的に廃棄された工業製品を素材として、機械文明や消費社会に対する批評を展開したとするならば、日常生活の中で排出される有機ゴミまで取り込んだ中西の視点は異質です。しかも構成という意識を欠いた廃物の寄せ集めは、はっきりとした形を持たないがゆえに異様な力を放っている。

この作品を日本の文脈に即して解釈するため、一九六二年という制作年に注目してみましょう。なぜなら六四年の東京オリンピックに向けて「首都美化運動」が急ピッチで進められていた時期と重なるからです。特に深刻だったのはゴミ問題でした。今では姿を消してしまった青い

プラスチックのゴミ回収容器が製品化されるなど、様々な対策が講じられました。周知のとおり、中西は、赤瀬川原平、高松次郎とともに結成した「ハイレッド・センター」という集団で、オリンピック開催中に「首都圏清掃整理促進運動」という美化運動のパロディとしてのイベントを実施しています。しかし、それに先立つ「コンパクト・オブジェ」においてすでに、ゴミ処理に躍起になっていた当時の社会に対する風刺を試みていたとは考えられないでしょうか。

中西が廃物を樹脂の中に封入する際、彫刻家ブランクーシの《世界のはじまり》を連想させる「卵形」を採用したことも示唆的です。その結果「コンパクト・オブジェ」は、芸術と日常、仮死と再生の境界を超える両義性をもつこととなります。すなわち、オリンピックに向けた街の美化という名のもとに強制的に排除され、表面的には見えなくなった都市の一面をオブジェとして保存しつつ、それがいつかどこかで再び孵化するかもしれないという未来の可能性を含んだ象徴的な意味合いを、この作品は内蔵しているのです。

二〇二〇年の東京オリンピックを控えた今だからこそ、この卵に封印された半世紀前の記憶に耳を傾けてみる必要があります。そう。

(美術課主任研究員 鈴木勝雄)